

機関番号：82705
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2008～2010
 課題番号：20530900
 研究課題名（和文） 吃音のある子どもの吃音及び自己に関する学習支援プログラムの構築
 研究課題名（英文） Construction of Learning Program for Children Who Stutter to Learn about Stuttering and Oneself
 研究代表者
 牧野 泰美（MAKINO YASUMI）
 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所・教育支援部・主任研究員
 研究者番号：80249945

研究成果の概要（和文）：吃音のある子どもが自己の吃音と上手く折り合い、自己肯定感を培っていくために、子どもが吃音及び自己について、どんなことをどのように学んでいけばよいのかを明らかにすることを目的に、文献研究、聞き取り調査、事例研究を行い、総合的に検討・考察した。その結果、学習の視点（吃音についての基礎知識、吃音者とその暮らしについての情報、自分自身の吃音についての探究等）、具体的実践方法、実践において教師に求められること、等についての知見が整理された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the content and the method of the learning about stuttering and oneself to cultivate the self-esteem of children who stutter. In this study, the review study, the interview survey, and the case study were performed, and those were considered overall. As a result, “the viewpoint of learning” (for example, “basic knowledge about stuttering”, “information about the life of adults who stutter”, and “the feature of own stuttering”), “learning method”, and “the teacher’s requirements”, etc. were done clearly.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：言語障害教育

科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育

キーワード：吃音、通級による指導、自己認識、吃音認識、自己肯定感、言語障害教育

1. 研究開始当初の背景

(1) 障害のある子どもの教育・支援をめぐる諸研究には、個々の病理学的、生理学的、心理学的特徴を明らかにすること、さらにはそれに基づき、個々の障害の改善、能力の向上を目指した指導方法等の開発を目標にしたものが多い。こうした研究がなされる意義は大きいですが、実際には個々の子どもはどのような病理学的、生理学的、心理学的特徴を有し

ながら、家庭・学校・地域等、周囲との関係の中で暮らしており、その中で様々な問題を抱え込んでいる。従って、障害のある子どもへの教育・支援に関しては、個の障害・特徴の解明とともに、そのような特徴を有する個が、周囲の中でどう生きているか、暮らしているかにも目を向け、問題解決の糸口を見つけておく必要があるが、現状ではこの観点からのアプローチはほとんど見られない。

こうした中で、研究代表者らはこれまでに、障害があっても暮らしにくさを払拭し、充実した暮らしを実現することに向けての教育・支援が重要であるとの観点から、主に言語障害のある子どもを対象に、通級指導教室における、日々の暮らしの充実等を目指した支援の観点や教育実践の試みを検討してきた。その中の一つとして注目されたのは、子どもの自己性、自己肯定感を育む支援であった。

(2) 言語障害は症状が治癒する可能性も、生涯、症状を持ち続ける可能性もある障害である。とりわけ吃音については治癒する可能性もあるものの、原因も未解明であり、確実に症状を改善させる方法は見いだされていない。従って吃音のある子どもや保護者にとっては、症状の改善、受容等、障害に立ち向かう態度が決まりにくく、精神的にも揺れやすい。また、吃音は話すことそのものの不便さばかりでなく、話すことへの不安、人や社会への恐怖、自己否定等、吃音があることによって生じる問題を抱えることも、それが人生を左右する問題につながることも少なくない。このような現状においては、吃音の科学的な原因究明や、治療法の開発に向けての研究が進められる一方で、子どもが吃音と上手く折り合い、つき合い、自己を保っていくための支援の在り方を研究することも重要と考えられる。

(3) 以上を踏まえて、研究代表者らは、吃音のある子どもの自己肯定感を支えるための教育実践の視点を検討し、その一つとして、子どもが自らの吃音や自己について学んでいくことの必要性を浮き彫りにした。そして、子ども自身が吃音の特徴などを学習することで、吃音と上手く折り合い、自己を支えていくことの実践的検討がいくつか試みられてきたが、子どもの状況に応じて、何を、どのように学んでいけばよいのかは見えていない現状であった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、上記の背景に鑑み、吃音のある子どもが自己の吃音と上手く折り合い、自己肯定感を培っていくために、子どもが個々の状況に応じて、吃音及び自己について、どんなことをどのように学んでいけばよいのか、その指標・内容を明らかにし、指導・支援の方法、学習プログラムを検討・構築することである。

3. 研究の方法

本研究では、文献研究、聞き取りによる調査研究、実践研究を関連させ総合的に検討・考察する。具体的には以下の通りである。

(1) これまでの吃音研究を収集・概観し、吃音及び吃音臨床に関する情報の整理を進めるとともに、とりわけ、子どもの吃音理解、自己意識を取り上げている研究、実践報告を収集し、知見を検討・整理する

(2) 成人の吃音者に対して、これまでの生活体験、吃音に対する思い、吃音についての必要な情報、学齢期に知っておくべき知識等について聞き取り調査を行い整理する。

(3) 言語障害通級指導教室担当教員に対して、吃音のある子どもへの指導の考え方、子どもの吃音理解・自己理解に向けての支援、指導内容、実践例等について聞き取り調査を行い整理する。

(4) 吃音のある子どもの保護者から、吃音についての思いなどを収集する。

(5) 以上を検討し、子どもの自己理解・吃音理解に向けた実践の在り方を検討する。

(6) 言語障害通級指導教室担当教員と連携し、継続的な実践研究と、実践事例の収集を行う。

(7) 総合的に考察し、吃音のある子どもが吃音や自己について学ぶための指標・内容を整理する。

4. 研究成果

(1) 子どもが吃音について知る、学ぶための視点について、文献研究、聞き取り調査、及び実践研究の検討から、吃音についての基礎知識（吃音そのものについての一般的知識）、吃音者とその暮らしについての情報（実際に吃音のある人がどのように生きているか、生活しているかといった観点からの情報）、自分自身の吃音についての探究（自分自身の吃音についての振り返りや見つめなおし）、の三つの視点に整理された。以下にそれぞれの内容例も含めて示す。

①吃音についての基礎知識

- ・「吃音」ということば
- ・症状の種類
- ・吃音の波
- ・これまでに考えられた原因
- ・有症率
- ・性差
- ・発吃の時期
- ・これまでに試みられた治療法
- ・分かっている吃音の特徴
- ・吃音についての間違った情報

等

②吃音者とその暮らしについての情報

- ・吃音の有名な人
 - ・吃音の人の職業
 - ・吃音の人の集まり
 - ・吃音の人がしている工夫
 - ・様々な吃音の人の考え方、生き方
 - ・様々な吃音の人の体験談
- 等

③自分自身の吃音についての探究

- ・自分の吃音のタイプ
 - ・症状が出やすい条件
 - ・苦手な場面・得意な場面
 - ・苦手なことば・得意なことば
 - ・症状が出ているときの身体の状態や気持ち
 - ・自分の吃音の不思議な点
 - ・様々な場面・状況の想定
 - ・どもることをどう考えるか
 - ・日常生活場面での自分の行動と気持ち
 - ・人とのつき合い
 - ・吃音を意識するとき、忘れるとき
- 等

(2) 上記の内容に取り組むこと、すなわち子どもが吃音について知る、学ぶための方法として、実践的検討を通して、以下のような例が整理された。

- ・ワークシートによる学習
 - ・録音を利用した吃音の特徴を知る学習
 - ・様々な話し方を試みることによる学習
 - ・言語関係図（症状、周囲の反応や態度、自分自身の気持ちの状況とそれぞれの関係）による学習
 - ・自分の話し方や、自分の気持ちを図や表に表す学習
 - ・短歌、詩、作文に表現することによる学習
 - ・小集団による子ども相互の吃音についての考えに触れる学習（気持ちをカードに書き報告し合う、様々なことを話し合う、等）
 - ・ロールプレイや演劇による学習
 - ・他者の悩みや困りごとを考える学習
 - ・クイズ形式による学習
 - ・ゲーム形式による学習
 - ・吃音者が登場する物語や絵本による学習
 - ・日常場面での対応を考える学習
- 等

(3) 上記の取り組みの実践的検討の中で、自分についての学び、自己理解は、一緒に学ぶ相手（教師）に影響されること、自分自身に対する見方の変換が重要なことが示唆された。また、実践を行っていく上で、他の吃音のある子ども、すなわち他者（仲間）の存在、他者（仲間）との出逢い、つながり、語り合いが、自分についての学び、自己理解を支える一要素となることも考察された。

(4) 数事例の継続的な実践研究を通して、子

どもが吃音について知る、学ぶことに向けて上記を実践する上で、担当教師に求められる事柄も示唆された。子どもの自己理解、吃音理解は、一緒に学ぶ教師に影響されることから、子どもと関わる教師の側が、吃音、吃音のある子ども、子どもが吃音と向き合うこと、等と向き合っているか、すなわち教師自身の吃音観や、教師自身の自己との向き合い方が問われること。もう一つは、子どもが様々な吃音に関する知識や情報を学ぶ上で、教師自身が周囲とのつながりや、吃音や吃音者に関する情報をいかに持っているかが問われるということである。これらは、教師自身が、吃音や、吃音のある人の暮らしや生き方、自分自身について、子どもと共に学び続けていくことの重要性を示している。

(5) 以上の本研究の成果は、言語障害通級指導教室担当教員が活用できる、子どもが吃音や自己について学ぶための手がかりとなる事例及び論考からなる冊子として編集・刊行した。成果が各地の言語障害通級指導教室等で活用され、吃音のある子どもが吃音について、そして自らの吃音について学び、自己を上手く見つめることにつながっていくことを期待すると同時に、各地での実践の蓄積により内容や方法の一層の充実を図りたい。

(6) 障害のある子どもの教育・支援において、個の状態の把握、能力の向上、症状の改善を目指したアプローチは、国内外で数多く取り組まれている。しかし、障害を抱えながら暮らすことによって生じる問題へのアプローチ、すなわち障害があっても充実した暮らしをしていく、障害を抱えながら生きていくことを支える視点でのアプローチは未だ数少ない。

とりわけ吃音に関しては治癒の可能性もあり得ることから、原因やメカニズムの解明、症状の治癒・軽減に向けての実践・研究は多くなされている。しかし現状では吃音の解明は簡単なことではなく、吃音のある子ども、人が、吃音に翻弄される状況への手だてとして、吃音と上手く向き合い、折り合い、自己を保っていくことを支えるという視点での取り組みは意味あることと考えられる。本研究は吃音そのものへの対処というより、吃音があることによって生じる問題をいかに解消していくかという視点に立つものである。

吃音のある人が吃音と上手く向き合っていく、折り合っていくためには、吃音や、自己の吃音のことをよく知っていくことが重要であり、本研究ではそのための学習の指標を示した。本研究は、子どもや教師が吃音を恐れず吃音と向き合っていく実践、吃音への支援をめぐる議論、等の活性化を促す可能性がある。また、自己を知る、自己を学ぶとい

う視点は、吃音のみならず発達障害等、他の障害に関わる取り組みにも示唆を与えることも考えられる。

(7)本研究においては、吃音のある子どもが吃音や自己の吃音について学習する際の、指導・支援の内容・方法の検討という点に関しては、一定の成果が得られたと考えられるが、学習支援プログラムという意味では課題も残された。今後、子どもの発達段階や個々の様々な状況も加味しつつ、指導・支援の内容・方法の体系化を進めることが重要と考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔その他〕

研究報告書

牧野泰美（編著）吃音を知る・学ぶ、自分を知る・学ぶための手がかり－吃音、そして自分自身と向き合うために－. 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所, 2011

ホームページ等

<http://www.nise.go.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

牧野 泰美 (MAKINO YASUMI)

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所・教育支援部・主任研究員

研究者番号：80249945

(2) 研究分担者

松村 勘由 (MATSUMURA KANYU)

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所・企画部・上席総括研究員

研究者番号：30280572